

小学3・4年生むき

夏休みにおすすめの本

『ちいさいおうち』

バージニア・リー・パートン/作 岩波書店 E-バ

しずかないなかの丘の上に、一けんのちいさいおうちがたっていました。季節の変化をじっとながめながら、おうちは幸せにすごしていました。やがて、広い道路ができ、たくさんのたてものがたち、ちいさいおうちに住む人もいなくなります。

『大どろぼうホッツェンプロッツ』

プロイスラー/作 偕成社 GY-プ

ものすごいかぎ鼻、もじゃもじゃの黒ひげ、ピストル、サーベルおまけに7本もの短刀で身をかためた大どろぼうホッツェンプロッツがぬすんだものは、なんとおばあさんのコーヒーひきでした。おばあさんのまごカスパールとその友だちゼッペルは、ホッツェンプロッツをつかまえようと知恵をしばって大作戦をてんかいします。さて、二人はおばあさんのコーヒーひきを無事にとりもどすことができるのでしょうか？

『がんばれヘンリーくん』

ベバリー・クリアリー/作 学研 GY-ク

小学3年生のヘンリーくんは、ある日町でおなかをすかせた犬に会い、アバラーと名づけて家につれて帰ることにしました。大きな紙ぶくろにアバラーを入れてなんとかバスに乗りこみますが、途中でアバラーがにげだして大さわぎになってしまいます。

『小さなスプーンおばさん』

アルフ・プリョイセン/作 学研 GY-プ

ときどき、スプーンくらいに小さくなってしまのおばさんがいました。小さくてもいつもどおり、お皿も洗うしケーキもやきます。カラスの女王にえらばれたり、家のねずみとも友だちになります。気のやさしいごていしゅも出てくる、ゆかいなお話です。

『黒いお姫さま』

ヴィルヘルム・ブッシュ/採話 福音館書店 GY-プ

一度入れば、もどってきた者はいないといわれる森がありました。美しい若者がその森の城に入っていくと、夜中の12時に男たちがやってきてお城中をひきずりまわされます。「魔法にかけられたお城」。この他、表題の「黒いお姫さま」を始め、11のドイツの昔話がのっています。

『かぎのない箱』

ボウマン、ピアンコ/文 岩波書店 GY-ボ

父ユルマのために、海の神と結婚した3人の娘たちの話（ユルマと海の神）など、フィンランドの昔話7話が納められています。フィンランドの人は、長い冬の間あたたかい部屋でさまざまな昔話を楽しんでいるのです。美しい自然と魔法がたくさん出てきます。

『パタポン』1・2

田中和雄/編 童話屋 908-パ-1・2

「きのうの かぜは／しょっぱかった／うみのうえを／ふいてきたから…」(「きのうのかぜは」岸田衿子) など、美しく楽しい詩がたくさん入っています。ぜひ、声に出してくちずさんでみてください。

『海中記』(ちしきの本)

小林安雅/著 福音館書店 48-コ

海の中をのぞいてみたら、生きものたちはどんなくらしをしているのでしょうか。海の生きもののふしぎなようすを1800枚の写真でしようかいします。まるで、海の中をさんぽしているような気分になる図鑑です。

『せいめいのれきし』

バージニア・リー・バートン/作 岩波書店 E-バ

何十億年の昔、地球は火の玉だったが、ゆっくりと冷え固まり、はげしい雨が続いて海ができた。さらに長い時がたち、海の中にはじめての生命があらわれる。地球上に生命が生まれてから「今」までのドラマが、プロローグと5幕の劇の形でくりひろげられます。

『木馬のぼうけん旅行』

アーシュラ・ウィリアムズ/作 福音館書店 GY-ウ

おもちゃづくりのビーダーおじさんが作った小さな木馬は、仕事ができなくなったおじさんのために、お金もうけをしようと旅に出ます。船を引いたり炭鉱ではたいたり、サーカスでつなわたりをしたり、いっしょうけんめいにはたらきます。

『沖釣り漁師のバート・ダウじいさん』

ロバート・マックロスキー/作 童話館出版 E-マ

バート・ダウじいさんは、潮まかせという名のおんぼろの船を持っています。ある日、このじまんの船に乗って、海に出たじいさんは、つりばりをくじらのしっぽにひっかけてしまいます。そこへ突風がふいてきて、じいさんは船に乗ったまま、くじらのいぶくろにひなんさせてもらいます。

『長くつ下のピッピ』

アストリッド・リンドグレーン/作 岩波書店 GY-リ

9才の女の子ピッピは、子ザルと馬をつれて、たった1人で“ゴタゴタ荘”に住むようになりました。そばかすだらけのピッピは、馬を1頭持ち上げられるほどのたいへんな力持ちでした。学校へも行かず、だれに対しても言いたい事を言うピッピのまわりには、ゆかいな出来事がたえず起こります。

『ふしぎな500のぼうし』

ドクター＝スース/作 偕成社 E-ド

バーソロミューは、先祖から伝わるぼうしをもっていました。ある日、町にやってきた王様にあいさつしようと、ぼうしをかぶって出かけて行きます。そこで、王様の行列に出会いぼうしをとりますが、ふしぎなことに頭の上には別のぼうしがのっています。とつてもとつても次から次へとあらわれるぼうしに王様は腹を立て、バーソロミューを殺そうとします。ちょうどそのとき、500個目のぼうしーそれはそれは見事なぼうしーがあらわれます。

『ペニーさん』

マリー・ホール・エッツ/作 徳間書店 E-エ

ペニーさんというびんぼうで年とった男の人がいました。家族はウマとメウシとヤギとブタとヒツジとオンドリとメンドリです。家族のたべものを買くと、ペニーさんが工場でもらうきゅうりようはなくなってしまうと。ところが、ある日動物たちがとなりのお金持ちの畑に入って作物を食いあらしてしまいます。お金持ちはペニーさんにべんしょうがわりに仕事をいいつけます。

『きつねものがたり』

ヨゼフ・ラダ/作 福音館書店 GY-ラ

森番がつかまえてきた子ぎつねを、むすこのエーニクと、むすめのルージェンカは、かわいがって育てました。ルージェンカは本が大すきだったので、きつねもおもしろがるだろうと、毎日本を読んでやります。そのうち、きつねは、人間の言葉がわかるようになります。一人前になったきつねは、一人で生きていく決心をして森へとにげて行きます。

『くらやみ城の冒険』

マージェリー・シャープ/作 岩波書店 GY-シ

ねずみたちが結成している「囚人友の会」で、くらやみ城にとらわれている詩人を救出することが決まりました。優雅な白ねずみミス・ビアンカとまじめなバーナード、船乗りねずみのニルスは、その任務をひきうけ、冒険にのりだします。お話を読みなれた人に。

『だれも知らない小さな国』

佐藤さとる/作 講談社 Y-サ

ある夏休み、ぼくは小さな山に迷いこみます。木々に囲まれた三角の平地で小さな泉まであります。ところがまものが住んでいるという言い伝えがあって、大人は近寄りません。ぼくは小山をひみつの場所にしていつも一人で遊びに行きますが、ある日、小指ほどの小さな人の姿を見ます。大人になって小山に帰ってきたぼくは、小人たちの「味方」にえらばれます。